野球におけるスキルサイエンス
Skill Science in Baseball

高木大成[†]
Taisei Takagi
[†]埼玉西武ライオンズ球団

対談者：加藤貴昭[‡]，諏訪正樹[‡]
Takaaki Kato, Masaki Suwa
[‡]慶應義塾大学環境情報学部

Keywords — Baseball, Skill Science, Instinct, Insight, Athlete, meta-cognition, flow experience, coaching

2009 年 3 月､野球発祥の地アメリカで行われた World Baseball Classic の第 2 回大会で、日本代表は 2 大会連続の優勝を決めた。近年の野球人気の低迷が囁かれる中で、日本代表が見せた歴史に残る名勝負は､野球ファンのみならず、多くの観衆に感動を与えたと言われている。野球が持つ魅力とは何であろうか？なぜ野球が面白いのか？本講演では、慶應義塾大学環境情報学部の出身であり、プロ野球界でも活躍した経験を持つ、現埼玉西武ライオンズ球団職員の高木大成氏を特別講師として迎え、その豊富な経験をもとに野球におけるスキルサイエンスについて対談形式でディスカッションを行う。

「躍動するアスリートたちの肉体は時に雄弁だ。苦痛に耐え、自らの力を誇示し、未知の領域へ挑み、やがて歓喜に震える」([1] p.3.)。このように鍛え上げられたアスリートの身体はいかにして形成されたのか。対談の序盤ではこれまでの選手生活を振り返りながら、スキル獲得をもたらした練習プロセスに注目し、その際に見出された「気づき」や、つかんだ「コツ」をはじめ、練習を支えた環境とその特性について議論する。

次に試合中、リアルタイムに創出される知、すなわち「直感」について着目する。時として試合中には「なぜか良く分からないが、こちらを選択したほうが良い結果をもたらす、という直感が浮かぶ」経験があると言われているが、例えばどのような状況において、そのような直感が生み出されるのか、身体と環境とのインタラクションにおいて生まれる人間の超越的な知の体系について議論する。また、野球においては対戦相手が何を考えているのかを考えることが重要となる場面が多いと言われているが、捕手の視点から打者を見る場合や、打者の視点から投手を見る場合にはどのようなことを考えるのかについても、実際の体験をもとに考察を行う。

さらに具体例をもとに､「フロー」や「ゾーン」といった神秘的な側面についても触れながら、野球選手が日々の競技生活の中で培われる経験について深く掘り下げる。このように競技者としての「内」からの視点で野球を見ることにより、普段はあまり語られない新たな魅力について再発見すると共に、スポーツにおけるコーチングやスキル学習に認知科学が貢献できる方向性を見出すことを目指す。また、現在の球団職員としての立場である「外」からの視点で野球を捉えることで、今後の日本の野球界に必要なもの、さらには目指すべき目標について提案する。

参考文献

[1] 小松成美，（2008）“トップアスリート”，扶桑社.